

西高卓球部のころ

二期生 荻村 伊智朗

高一、七月。上級生壁新聞を職員室に貼り出す。「檄」とある。校長先生に宛てた卓球部設立の威張った嘆願書だ。面白い、と思う。一週間、檄文ははがされたり貼られたり。やがて部員募集のビラが。心意気のある奴の顔もみたくて集まりへ。案に相違。集まりは二派にわかれてゴチャゴチャ。卓球部派と同好会派に分裂。予算なし。中田、田中氏の率いる卓球部派へ参加。お二人が電燈なしの体育館の暗がりで行く。合うフォームに見ほれて。フォームの模倣時代三年続く。中田さんを慕って碑文谷へ、荻窪へ。試合でナメられた相手に怒りのブラフプレイをせよとの厳命に背く。叱責と落涙。自立への姿勢きまる。この一年のころラケットは木からコルク、そしてラバーへ。ラバーをセメダインで貼ったらどうも音がへん。首をかしげていたら吉田だかにゴムのりで貼ることを教えられる。市川、田辺と追いつ追われつ、たいへんだ、とだれかが昼休みだかに教室へ駆けこむ。「せこい奴がきたんだ」と。体育館へ。カットをやってバックハンドをやる「せ

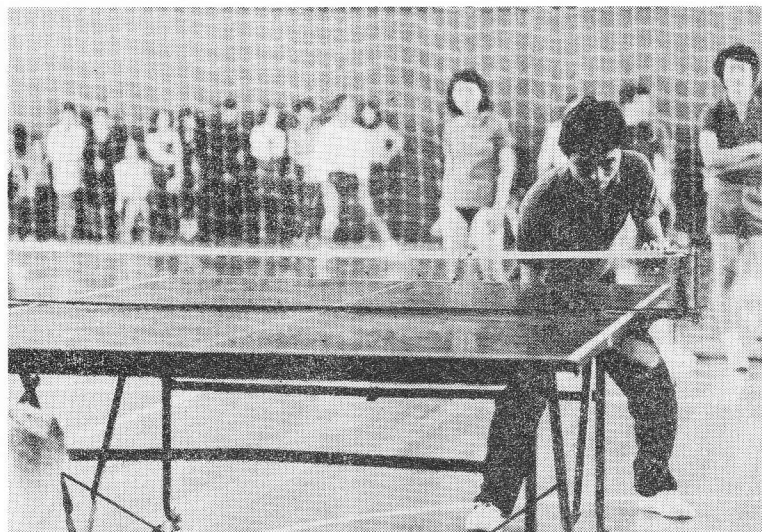
こい」奴。亀田オールラウンダーの登場だ。オールロング、オールフォアの「西高正統派？」との緊張した対決がつづく。亀田の胸中にはなにか、漸次オールフォアのプレイへ。田中氏の指導力このころ自然に強まる。一年の秋、光る青空の下、のんびりと弁当を喰う俺を乗せて水道通りを大八車がゆく。渋谷の卓球場で中古の台を買い、だいにだいに西高へ。秋の冷雨が破れ屋根から降りこんでくる授業時間は気も上の空。関東名物空っ風。吹けば休み時間は一目散、土を払いに。「近ごろ卓球台にはほりがかぶらぬようにと校庭に水をまくヤカラがいるが、黄河の例を挙げるまでもなく……」と歴史の授業でスキおろされる。その精神は愚公移山なのだが……。二台めはリヤカーに自転車で渋谷へ。急坂を転げ落ちみごとリヤカーの下敷き。練習を休む無念と不安。二年の七月、進歩は顕著。高千穂の富田に練習試合で肉薄。果てしない希望を抱く。武蔵境の卓球場へこのころ夕方徒歩通学。床の油（停電のときのろうそくの名残りか）に転倒。40日の病床生活へ。暮を覚えたのは収獲だったが、フォームはめっちゃくちや。すっかり立ち腰。半年はスランプ。春、五月、憲法大会で優勝。あのころの隅田川の河風、藤崎、田中、甲子、原田、その他の顔と共に記憶に鮮か。キャプテンとなって修学旅行返上。藤崎先生、真剣にインターハイ行き予算折衝開始。名門校同盟の組み合せの厚い壁にハネ返される。かくて中・高校を通じて修学旅行なし。合宿経験はケツ作。文化

祭の夜、ひそかに泊りこむことを加藤先生がOK。〃オレが宿直をやる!〃とのことで先生方が慰労の旅に出たところで教室を整理して夜通し練習。日の出屋で10時半ごろ俺がミソ汁を釜でたいていると、注進あり。都築教頭が忘れ物をとりに帰校してたく御立腹、即刻下校しなければ処分とのこと。毛布かついで一同シュンとして解散。翌日、甲子だか原田だかが深刻な顔をして退部の相談。これらのシヨックにもめげずキャプテンはがむしゃらにランニングを実施。午後は毎時限終了後、浜田山あたりまでのアゼ道を40分ぐらい。女子の斉藤、荒瀬をはじめ、部員は多くなり、練習終了はテニス部、野球部と共にいつもラスト争い。

物質的に恵まれない環境は精神的により刺激の多い環境である。貧しくして志変るといいうが、私たちの場合もまさにそうだった。

私たちの場合、大げさにいえば、日本民族としての初体験的なことが多い。軍国主義時代、戦争、空襲、敗戦、被占領、与えられた民主主義、混乱した世相。スポーツは救いでもあった。後輩のことを考えると、オイルシヨックまでは出来上がった社会の枠ぐみの中の学校スポーツ。いまの方が難しい環境だ。継ぐ、という感じが強くなってしまっただけはない。やはりスポーツは一代性の活動。創る、という感覚を強く求めたい。肥満児的な日本人社会は内から変る要素は少ないが、たぶん、外からの強震によって激動の時代を迎える

だろう。そんな中でスポーツの意義を自らに問いながらも、やっぱりやめられない、そういう後輩が西高からはやっぱりおおぜい出てくるような気がする。



▲ 記念祭の時、新体育館にて 荻村伊智朗氏